

I. 平成15年度事業報告

1. 第3回とくしまNPOフォーラムシンポジウム報告

シンポジウム記録：『力あるNPOづくりのためにできること』

(第3回とくしまNPOフォーラム・第二日目午後の記録)

檜田美雄・山中英生・齋藤雅治
矢部拓也・中村英雄・本郷澄子
饗場和彦・麻野新一・阿部圭宏
寺尾俊喜・平井松午

日時 : 2003年11月9日(日) 14時20分～17時05分
場所 : 徳島大学 新・共通教育棟6階、創成学習スタジオ
主催 : 第3回とくしまNPOフォーラム実行委員会(とくしまNPO連絡会議)
共催 : とくしま県民活動プラザ・徳島大学・徳島県社会福祉協議会
司会 : 檜田美雄

総括討論者 : 山中英生

シンポジウム話題提供者 :

- 齋藤雅治 (NPO法人 ピース ウインズ・ジャパン海外事業部)
『若者をひきつけるNPO—ピース ウインズ・ジャパンの実践』
- 矢部拓也 (徳島大学総合科学部)
中村英雄 (NPO法人 新町川を守る会理事長)
『NPOに対する大学のIT支援—新町川を守る会の場合』
- 本郷澄子 (四国大学短期大学部、NPO法人 You&ゆう 代表)
『福祉系NPOの立ち上げの苦労』

発言者 : 檜田美雄・山中英生・齋藤雅治・矢部拓也・中村英雄・本郷澄子・饗場和彦・
麻野新一・寺尾俊喜・平井松午

以下に掲載するのは、2003年11月9日に、徳島大学・創成学習スタジオにおいて開催されたシンポジウム『力あるNPOづくりのためにできること』の全記録である。このシンポジウムは、同会場を中心として二日間にわたって開催された「第三回とくしまNPOフォーラム」の総括として二日目の午後に行われた。親企画の「とくしまNPOフォーラム」は、徳島県内のNPO(非営利組織)に相互交流と連携の機会を提供するために有志NPOが共同して実行委員会を設け開催しているものである(2001年12月に開かれた大会が初回)。本年の第三回大会では、はじめて徳島大学が共催組織として加わり、会場も徳島大学内に設定された。これは大学側の呼びかけによるものである。徳島大学は2003年秋に学内の3つの機構のひとつとして社会貢献機構を設立し、地域貢献を大学の主要な任務のひとつとしたが、本フォーラムの共催はこの社会貢献機構の活動の一部として行われた。

実は今回のシンポジウムの内容は、上記で記したように今回大学がフォーラムの共催団体となったことを受けて設定されたものである。すなわち、「力あるNPOづくり」というテーマは、その実現のために①大学生のような若者の力が有用なのではないのか、②大学スタッフの専門知識とコーディネート能力が生かせるのではないのか、という2つの仮説があり、それを検討しようという意図で設定されたテーマなのであった。実際のシンポジウ

ムがこの課題に答えるものであったかどうかは、以下の記録を読んで読者各人が判断して頂きたい。ただ我々のシンポジウム開催意図は上記のようなものであった。このことだけはここで確認しておくこととしよう。

参加者総数は100名強と例年のシンポジウムより少なかった。これはテーマがいささか抽象的で応用可能性の低いものに見えたことが影響してのことだろう。十全に活用して頂ければ幸いである。

なお、本報告末尾には司会者・総括討論者・パネリスト等のプロフィールも参考用に掲載してあるので活用してほしい。また、本記録はほぼ同内容が、WWWサイト（いわゆるHP上）にもシンポジウム当日の動画ファイル記録付きで掲載される予定である（2004年3月中旬頃運用開始予定）。サイトアドレスは <http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/> である。テロップ付きのもの掲載準備を進めているので、NPOの問題を考える素材のひとつとして、学習会等の教材としてお役立て頂ければ幸いである。（樫田美雄）

（1）挨拶と趣旨説明

樫田：これから第3回とくしまNPOフォーラムのシンポジウムを開催いたします。本日は「力あるNPOづくりのためにできること」というテーマでまず三人の方に話題提供をして頂き、小休止を終えた後パネルディスカッションに進むという形にしていきたいと思えます。パネリストの発表の前に、工学部の山中先生から趣旨説明があります。よろしくお願ひいたします。

● シンポジウムの趣旨と配付資料の説明

山中：趣旨を説明するというので、簡単に説明させていただきます。私は第一分科会におきまして、時間通貨の問題についての分科会でコーディネーターとして参加させて頂き、マネジメントする人たちの役割の重要性を認識いたしました。これからこうしたマネジメントする人材をどうやって育てるのか。今までそれをやってきた人たちが大勢いらっしゃるのですが、それを引き継ぐ人たちがどうやって育成していくかが、大事となってくると思えます。あるいは、団体を超えた、シームレスなネットワーク、これは先程述べられた言葉なのですが、そういうものも必要となってくると思えます。そういった中で、大学は一体どうしたらいいのだろうという、という我々大学側の問題があります。それを考えていく上でも、今回こうした催し物に、徳島大学を会場として使って頂いたことに、大変感謝しております。

実際大学は何をしていけばいいのか。特に我々は、大学というところは難しい研究をするところで、大学教員の中でしか付き合わないようなふうにならざるを得ない。しかし実際はそうではなく、たくさん抱えている学生達を、世の中の役に立つように育てなければならぬ、という使命感を持っています。彼らが何とか社会の中で役立つように育ててほしいという思いの中で、皆さんのボランティア活動と大学側がどんなふうに関与をとっていくのか。あるいは我々が育てた学生達をどうやって世の中にだしていくのか。何とかこの学生達を使ってもらいたい、という思いで、このシンポジウムに関わらせてもらっています。これからの若者達を育てていく中で、我々も何とか地域貢献をしていきたい。そういう熱い思いを抱いて本日ここに来させて頂きましたのでよろしくお願いいたします。

樫田：山中先生には総括もお願いすることになっております。配布資料の確認をいたします。本日のシンポジウムのパンフレットをご覧ください。その中に書いてあります「力あるNPOづくりのためにできること」というテーマで本日のシンポジウムは運営していこうと思えます。発表の順番はここに載っております。これをお手元に置いて見ていただきながら聞いていただくとわかりやすいかと思えます。

まず、話題提供ということで、お三方に連続して発表をしていただきます。第一発表者

の齋藤雅治さんの資料として、『ピース ウインズ・ジャパン』のパンフレットがお手元に配布されているかと思えます。第二発表者の矢部拓也さんのほうからは、おまけのCD-ROMと、話題提供の資料として白黒印刷による『NPOに対する大学のIT支援』が配布されています。これは発表の画像をコピーしたものです。これをご活用ください。第三発表の本郷澄子さんのほうからは、同じく白黒のB4サイズ1枚のチラシが、配布されています。

この順番で、12分ずつの発表をして頂きます。各発表の直後に、短い質問の時間を取りますので質問のある方は挙手をお願いいたします。この発表に40分の時間を使わせていただき、そのあと休憩を取って、パネリスト6人が壇上に並びまして、最後の、パネルディスカッションをそのあとで行っていかうと思っております。

(2) 話題提供

樫田：それでは、発表者の紹介させていただきます。第一発表をお願いしておりますのがピース ウインズ・ジャパンの海外事業部のご所属であります、齋藤雅治さんです。今回はテーマ「若者を引きつけるNPO ピース ウインズ・ジャパンの実践」という枠組みで発表していただこうと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

1) 齋藤雅治氏発表：「若者をひきつけるピース ウインズ・ジャパンの実践」

齋藤：みなさんこんにちは。ピース ウインズ・ジャパンの齋藤と申します。今日は東京からまいりました。今日のテーマは、「ピース ウインズ・ジャパンの軌跡」ということでタイトルを書きましたけれども、12分という時間ですので、十分なお話ができるかどうかかわからないのですが、よろしくお願いいたします。座って発表させていただきます。

今日、皆さんにお話しさせて頂く内容を簡単に説明させていただきます。まず、ピース ウインズ・ジャパンの設立から今日までの経緯をお話しさせていただきます。それからどんな人間が、ピース ウインズ・ジャパンの活動を支えていくのかというようなことをお話しさせていただきます。お手元にお配りしておりますシンポジウムのチラシのタイトルでは「若者を引きつけるNPO」という名前になっております。その中に書かれているPWJというのはピース ウインズ・ジャパンのことですが、このピース ウインズ・ジャパンの魅力というものはいったいどこにあるのかということを、それから最後にわれわれの団体が直面する課題と挑戦についても、お話しさせていただきます。

ピース ウインズ・ジャパンが団体として設立されましたのは1996年2月1日です。イラクでクルド人自治区のクルド人に対する支援活動を行っていた、現在の弊団体の総括責任者が設立したものです。彼は元々他の団体でクルド人の支援をしていたんですけども、その団体が支援をストップすることになりまして、彼としては非常に困っているクルド人の支援を、何とか続けたいということで、立ち上げたのがきっかけです。そのあと1999年10月にNPO法人格を取得しております。

現在の活動地域ですけれども、現在海外に事務所を置いて活動しているのは、イラク、モンゴル、インドネシア、東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタンの6カ国となっております。お手元にお配りしましたパンフレットに、各地域の活動状況が書いてありますので、こちらは今日の発表には直接使いませんが、後ほどお読み頂ければと思います。

次に事業規模です。2002年度の事業予算としましては、約9億円の予算が立てられております。そのうち4割が会員からの会費収入、それと一般の方からの寄付も含めると、約半分がそういった形の自己資金を活用しております。国際機関や民間の財団からの助成金については2割ということですが、これを見ても分かるように自己資金の割合が非常に高いということですが、特にイラクの、クルド人地区への支援においては、当初のまだサダム・フセインが政権を握っているときにも、マイノリティーであるクルド人への支援を行っており、資金面で支援を得ることが、非常に難しかったものですから、こういった自己

資金の割合が高いということが、われわれの独自の判断で活動を行える要因になっていったと思います。

スタッフの陣容



- 1996年設立時 スタッフはわずか3名
- 2003年11月現在 60名（休職者含）
- 海外の各事業地で雇用する現地スタッフ
総勢約280名

次にスタッフについてですが、1996年の設立のときには、スタッフはわずか3人でした。今年の11月現在で、60名のスタッフがおります。この60名は日本人並びに外国人のスタッフも含め、有給のスタッフです。非常勤、常勤パートタイム、その他も含めますけれど、給料を払っているスタッフが合計で60名です。休職している者も含まれます。それから先ほど申しました現地のスタッフですが、6カ国で約280名になっております。それからボランティアの方々ですが、ピース ウィンズ・ジャパンの活動を支えてくださっているの方々ということで、ボランティアとして登録していただいている人数は250人ほどです。それから会員として登録していただいて、会費を払って活動を支えていただいているの方々というのが約2,000名いらっしゃいます。これには一般の方々だけでなく、企業の団体会員の方々も含まれます。この他に、会員として登録はされていませんが、われわれの活動に寄付をいただいているの方々というのが約3,000名以上おられまして、この方々が私たちの活動を支援してくださっているということになっております。

先ほどの説明にもありましたように、若者を引きつける活動ということで、ピース ウィンズは若者の多い組織というふうに見られることが非常に多いのですが、スタッフの内訳を見ると、20代から30代が7割、私もかろうじてここに入っています。ボランティアの方は、若者が中心ですので10代から30代の方が9割、ただしボランティアの方の中には、経験を積んだ方もいらっしゃって、50代や60代の方もボランティアとして活動していただいております。

● ピース ウィンズ・ジャパンの魅力

次に、ピース ウィンズ・ジャパンの魅力とはということについて、お話をさせていただきます。実は私がピース ウィンズに入ったのは去年の7月です。私自身が、NPOで働くことを決断するとき何故ピース ウィンズを選んだかということにも関連してくると思いますが、いったいピース ウィンズ・ジャパンという組織の何が強みなのかと言いますと、こちらの3点が挙げられるかと思えます。

PWJの魅力とは？



- 「わかりやすいメッセージ」を伝える
- 迅速な支援を実現する機動力・技術力
- 参加しやすさ「できることを、できるときに」

1点目は、「わかりやすいメッセージを伝える」ということ。それによって支援の幅を広げるといふこと。2つ目は、とにかくわれわれの活動というものは紛争とか災害が発生したところで、非常に迅速な支援が必要となっておりますので、そうした事態に対して、いかに迅速に必要な支援を実現するかということが鍵になるかと思ひます。ピース ウィンズ・ジャパンはこの機動力、ならびに実力というものを備えた組織といえると思ひます。それから最後の3点目は、先ほども申し上げましたボランティアの方々が、参加しようと思つたときにどんな形で私たちの活動に参加できるのかといふことで、活動の幅が多ければ多いほど、参加といふのが活発になるのではないかと思ひます。こうした三つの点が我々の団体の組織としての強みではないかと思ひております。最後に、われわれを支援していただいているボランティアの方々が、どういったことに協力していただいているかといふことをお話しさせていただきます。

1点目の、「わかりやすいメッセージ」といふことですが、こちらはピース ウィンズ・ジャパンの団体のビジョンとなっております。提示してあるものを読ませて頂きますが、「すべての人々が紛争や貧困などの脅威にさらされることなく、人間らしい生活を営める世界を目指す。」といふことで、私たちがどういったところで活動を行うかといふときの原則となっております。私たちの原則としますところは、その時の政府とかが機能していない、あるいは存在するけれども役割を果たしていない、国民に対して支援活動ならびにちゃんとした行政がなされていない、いわゆる破綻国家と言われるようなところで本当に困っている人たちに対する直接的な支援を、その国に代わってするといふことです。その国に対しては内政干渉と言われかねないこともあるのですが、でもそれが何故必要かといふと、目の前に困っている人たちがいて、誰もそれに手を差し伸べていないからです。

が、実際には、本当に困っている人たちに対して直接支援を届けるといふことは、これはなかなか難しいことで、中立的な支援といふのは非常に難しいことです。例えばサダム・フセイン政権時代のクルド人への支援といふのは、政権がきちっと支援を行っていないマイノリティーの人たちへの支援ですので、われわれの団体はイラク政権からは敵視される存在でありました。そのため非常に危険を伴うこともあります。ただ今回イラクのバグダッドが陥落した後ですね、クルド人とアラブ人との間で争いが生じた状況が続いているわけですが、われわれが行った支援活動といふのは、その前[バグダッド陥落の前]

はクルド人だけを対象にしていたわけですね。ただ、バグダッドが陥落してフセイン政権が倒れた後は、クルド人に対する支援はもちろん行いましたけれども、逆に、クルド人自治区側に逃げてきたアラブ人というのがいたんですね。クルド人がもともと支配していたキルクークという都市があるんですけども、バグダッド陥落後にクルド人が戻って行って、アラブ人がそれまでのクルド人の住居を占拠した形で住んでいたわけですけども、そのアラブ人が今度はクルド人に追われて困っている状況においては、今度はアラブ人に対する支援も同時に行う。ですから対立している両方に困っている人がいた場合には、一方だけ支援するのではなく、もう一方も支援するという公平な支援をするということで、我々の活動というのはかなり分かり易い支援として、理解していただけるのではないかと思います。

次に二つ目は迅速な支援のための機動力・技術力ということで、先程申し上げたとおり、紛争の直後あるいは紛争中も避難民の生活を守るために、迅速な救援活動を展開するということが必要です。これはタイミングを逸すると、支援を届けようと思っても届けられない、あるいは届けたときにはもう間に合わず、実際に人々の命が失われてしまうということにもなりかねません。ということで、いかにその迅速な支援活動を展開していくかという組織の機動力が重要になってきます。もう一つ、技術力の面ですけども、実際にわれわれがこういった緊急支援の活動を行う中で、やはり既存のものを使っているは事がうまく進まないというようなことがあった場合に、それを自分たちの力で開発してしまおうということになります。これはかなりのアイデアを持って、なおかつ民間の技術も拝借してということになるのでですけども、私どもはそうした開発も行っております。これについては次に詳しく説明させていただきます。

まずこちらのスライドは国内避難民に対する緊急支援ということで、アフガニスタンの例です。左手のスライドをご覧ください。2001年9月12日のアメリカの同時多発テロがありました。私どもはそれ以前からアフガニスタンに対する支援を行ってまいりました。その時は紛争への対応ではなく、アフガニスタンの北部にありますサリプルという町に、長年干ばつが続いて、村で飲み水が確保できないような人たちが、もともと空港の滑走路として使おうとしていたところに自分たちでキャンプを築いて住んでいたんですね。[スライドを示して]こちらのテントは実は私どもが越冬支援ということで送り届けたテントです。

国内避難民に対する緊急支援

アフガニスタンの例





2001年9月の同時多発テロの後紛争が始まったものですから、なかなかアフガニスタン国内にこういった物資を持っていくことができなかったのですが、2001年の冬を前に、このテントを数にして5600送りました。現地は冬が非常に厳しいので、こちらのテントは実は越冬用のテントということで、二重になっております。こちらの支援は、冬を逃してしまっただけでは意味がありません。このテントを届けることによって、彼らは冬を越すことができました。右のスライドですが、小麦を配っております。冬を前にして、ここに住むことになった国内避難民の方々に、いかに迅速な支援をこの規模で行うかということが最大の難関だったのですが、我々の組織の機動力を駆使した結果、なんとかこの支援を実現することが出来ました。

次のスライドですが、こちらはバルーンシェルターというものです。写真の中にご覧いただけますアーチになっているテントです。この写真はインドで2001年の1月にグジャラートという州で大地震があった時のもので、支援物資配給所としてこのテントを使用しました。

なぜこのテントを開発したかといいますと、このような大規模な規模の倉庫ですとか、支援物資の配給のための建物をこういった災害地で作ろうとしたら、機材を集めて運び込んで建設するというふうに非常に時間がかかる、まあ、何ヶ月とかかるわけです。いかにこの支援物資を雨から守って、なおかつ、配給のシステムができるようなものをいかに早く立ち上げるかというのが、私たちの課題でした。今までの私どもの緊急支援の活動の中から学んだ教訓としまして、こういうものがあつたらいいなということで、われわれのエンジニアのチームが、帝人株式会社の方々と、共同で開発しました。この「バルーンシェルター」というのは、このテント自体に備えてある発電機で、テントの中に風を送りこんでテントを立ち上げるというシステムになっております。ですから、これを持ち込んで、そこでセットアップすれば、かなりの短い時間でこれだけの規模の建築物が、設置できるということになっております。ただし今申し上げた通り、これは発電機が必要になっていて、当然発電機や燃料も持ち込んでということになるものですから、今われわれが考えていますのは、もうちょっと小さい規模で、発電機が要らない、なおかつ自動で立ち上がるようなテントを開発できないかということです。

バルーンシェルター



避難民100人を雨から守るアーチ状の巨大テント

ピースウィンズ
エンジニアチームが
帝人株式会社と共同
開発



3つめの魅力としては、主にボランティアの方々が、どのような形で私たちの活動を支援していただけるか、そのためのさまざまな参加の方法を提供できるかということです。これまでの私どもの活動は非常に危険を伴う、紛争地域とか紛争後間もない地域で活動しているものですから、今まで、ボランティアの方々に実際に海外に行っていただいて、何かわれわれの活動に参加していただくということは、お断りしております。その代わりにそれでは、どういった形でわれわれの活動を支援していただけるかということで、こちらに書いてございますが、一つには、「事務の補助」ということで、私どもの東京事務所の事務補助やニュースレターなどの発送業務をお願いしております。二つ目には、「イベント補助」ということで、月に1回くらい海外から帰ってきたスタッフによる帰国報告会を行っておりますが、その運営はボランティアの方々にお願いしております。他にも、年に1回の国際協力フェスティバルというのがあって、これにピース ウィンズが参加したときにはボランティアが主体でこの運営を行っております。それから三つ目の、「ボランティア主導の企画・立案・実施」ということですが、われわれの団体には、ボランティアが250人もいますので、かなりいろいろな特殊技能を持った方々の集合になっておりまして、彼らの技能を活かさない手はないということで、彼ら自身がアイデアを出して、いろいろなことをやっていただいております。ボランティアとして関わっていただく中で、私どもの活動に非常に興味があるということで、例えば、ピース ウィンズが行っている活動すとか、活動していく地域についての研修会を、彼らボランティアの間で行っております。また、中学生など、学校単位でピース ウィンズの活動を知りたいということで、うちの事務所にお話をいただくこともあるのですが、その時のピース ウィンズの活動紹介や国際協力への理解のお手伝いといったようなことを外に出て行くときにも、こうしたボランティアの方をお願いしております。

それからホームページのリニューアルということですが、ピース ウィンズ・ジャパンのホームページを、実は今年の7月にリニューアルをいたしました。通常このホームページのリニューアルというのを外注しますと、非常に高いお金がかかるわけですが、こちらのリニューアルについても、実はデザインコンサルタントをしていらっしゃるボランティアの方をお願いすることができました。そういうデザインに関わる方とわれわれの活動とは、全く関係がないように思われますが、そういったことでもわれわれの活動のお手伝いをしていただいております。

また、私どもの団体のホームページを1度ご覧になった方もこの中にいらっしゃると思いますが、その中に、ひらがなで「ぼらんていあ広場」というところがあります。こちらをクリックしていただくと、この中はボランティアが運営しているページで、そこでは、ピース ウィンズ・ジャパンのボランティアが、いったいどんな、どのくらいの活発な活動をしているかということをご覧いただけたと思います。本当に、われわれが考える以上にいろいろなアイデアを持って協力していただいておりますのでもし機会があればぜひご覧ください。

● ピース ウィンズ・ジャパンの課題

そして最後になりますが、「課題と挑戦」ということで、先程申し上げた通りピース ウィンズは非常に若い組織ということで、若いがための課題というものがあると思います。この若さとは、強みにもなるし弱みにもなるという両面があると思います。こちらに3つあげました。今日いらした方の中には、これまで何十年とこういった活動をしてこられた方がいらっしゃると思います。その中で、まだ8年足らずのピース ウィンズ・ジャパンについて述べるのは大変おこがましいのですが、それでも96年に組織を立ち上げてから7年あまりの間に、直面してきたことにそれなりに取り組んできた中で、今後さらに組織が発展していくためには、どういったことに力を注いでいったらいいかということで次の3点述べさせていただきます。

課題と挑戦



- 支援活動の中核となる人材の確保と育成
- 経験の蓄積、反省・教訓のフィードバック
- シビルソサエティにおける他のアクターとのさらなる協調

1 点目は支援活動の中核となる人材の確保と育成の問題です。ピースウィンズに集まっている人間が若いというのは、国際協力あるいは緊急支援の分野で活動する人材が、なかなか育っていないという現実があるということです。その結果として、スタッフが若い、経験が浅いということになるわけです。ただ私達としても、非常に経験が豊富で、海外に行ってもすぐ仕事ができるスタッフを実際に雇用するというのは、なかなか難しいわけですね。この業界で仕事を見つけるのは非常に難しいのですが、仕事を見つけるのに経験がないと、仕事が手に入らない、でも仕事を与えないと経験が身につかない、その 2 つがジレンマとしてあるものですから、やはり経験の浅い人々であっても、実際組織の中に入ってから経験を積んでもらうことによって、徐々に 1 人前といただけますか、この分野で独り立ちしていけるような人材が育っていけたらいいのかなと思っています。但し私どもの活動というのが、緊急支援ということで、まあ人の命を預かることにもなりますし、かなりの緊張感の中での判断を必要とすることもありますので、中で人材を育てていくのはなかなか余裕がないわけですが、それでも中にいる人材をいかに育てるか、場合によってはその人材を外に出してそこで研修を重ねるということも考えなければいけないのです。そうすると実際に日々の業務があるわけですから、その人間を日々の業務から外し、研修に出しても、それをカバーするキャパシティが組織の中になければならない、ということが問題となってきます。たぶん NGO の中ではまず少数派だと思うのですが、私どもの団体では、研修についても予算を確保しております、中に入った人材の育成ということを努力して行っております。

それから 2 番目ですけれども、「経験の蓄積、反省・教訓のフィードバック」ということですけれども、緊急支援あるいは災害復興支援ということで現場に出向いて行ってそこで活動をかなりのスピードでやって仕上げて帰ってくるという、動きながらの活動を展開しているものですから、なかなか記録が残らないんですね。今までの活動ってというのがこんな形で行われて、それが果たして成功だったのか失敗だったのか、成功は何が成功の鍵だったのか。今後同じような活動をするために、その成功をどうやって活かせるのか。あるいは失敗については、それをどうやって今後の反省材料として、次の類似の事業でその失敗を回避できるのかというようなことを、本当は蓄積していかなければいけないので

すけれども、7年たってもまだこの情報・経験の蓄積というのが十分できていない、という反省があります。ですから今やっていますのは、過去の事業の実績のデータを集めまして、そこから今後の活動の修正に結び付けるようなものを集めるというようなことをやっております。

そして最後になりますが、「シビルソサエティーにおける、他のアクターとのさらなる協調」ということを書きました。ピース ウインズとしては 96 年から7年たってここまでの組織に育ってきました。今までは国や政府などのパブリックセクターが公益をもたらすことを目的に活動を行ってきたわけですが、今後はNGOやNPO団体が、シビルソサエティーの担い手として、横のつながりをさらに進めていく必要があるのではないかというふうに思っています。こちらの支援にみられる 5,600 のテントの供与など、なぜあのタイミングで、あの規模で支援が出来たのかといいますと、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、ジャパン・プラットホームという組織があります。こちらは政府と経済界とNGOと民間財団などがそれぞれの強みを生かしたネットワーク組織でして、そこからアフガニスタンの緊急事態に当たって、規模の大きな初動資金を得て、ピース ウインズがアフガニスタンで活動できたわけです。このセクターを超えたネットワークというものをより活発に進めることによって、第三セクター全体がもう少し力をつけて、パブリックセクター、民間セクターと同等の発言ができるようなネットワーク作りが可能ではないかと思えます。それに対して、ピース ウインズも今後もっと役割が果たせるのではないかというふうに思っております。どうもありがとうございました。

檜田：質問を受けさせていただこうと思います。どなたかご質問ないでしょうか。いらっしゃるようですね。次の第二発表に移らせていただきたいと思います。

第二発表のタイトルは「NTOに対する大学のIT支援」という内容でお二方の共同発表ということで、矢部拓也さんと中村英雄さんをお願いいたします。

2) 矢部拓也氏発表：「NPOに対する大学のIT支援」

矢部：徳島大学の矢部です。今日は、NPOに対する大学の、IT支援ということでお話しさせていただきます。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私はこの4月に、徳島大学に赴任してきました。大学院時代から、滋賀県の長浜市に毎月1週間くらい泊まり込んで、実際のまちづくりに関わりながら、まちづくりの研究をしてきました。現在も長浜には通っています。また、この長浜で11月にNPO法人になった「まちづくり役場」の理事も務めています。研究者ではありますが、このように実践的な面にも関わっていますので、今日は、こういった実践的な視点から、「大学がNPOに対してサポート出来ること」ということで何か提言できたらと考えています。それと徳島に赴任して、4月からやってきた事をすこし紹介できればとも思っています。

最初は、新町川を守る会を取り上げて、中村さんと2人で報告しようと思っていたのですが、準備が間に合わず、今回僕だけが報告することになってしまいました。しかし報告内容は、徳島でのまちづくり活動の経験に基づいています。具体的には、僕は、中村さんのところでのイベントがある場合には、僕が学生を連れていったり、また私の専門が中心市街地活性化ですので、フィールドに近いということで、両国橋の袂の銀座商店街に住んでいるので、学校の行き帰りには、中村さんがいるときなどはポートハウスによってひょうたん島クルージングを手伝ったりしています。今日の報告は、その中でいろいろ教えられたことを基に作っているので、中村さんにも前に一緒に来ていただいています。

● 私の研究テーマ

まず私の研究テーマを簡単に述べさせていただきます。この写真の真ん中に出ている

のは僕です。ちょっと^{やさおとこ}優男に見えるのですが、意外にこういうのも似合まして、これは滋賀県長浜市の曳山祭りというお祭りの裸参りに参加した写真です。僕の場合、研究と言っても、基本的にはお祭りやまちづくり活動などに参加して、まちのひとと一緒に活動した中で教えてもらったことや感じたことを、論文としてまとめていく研究の仕方をしていきます。今回も 発表の準備をしたのは僕ですが、どちらかというと中村さんや他のNPOの方々と一緒に話していることを、僕が代わりに報告しているというような形になります。

まとまりが無く申し訳ないのですが、今からこれまでのことを報告させていただきます。分量が多くてちょっと消化不良になるかもしれませんが、お聞きになって こういうふうにしたほうがいいのか、一緒にできるよってというようなことがありましたら、どんどん意見を出して下さい。みんなで一緒にやって行きたいなと感じるような活動を提案することが 今回の僕の報告の目的でもあります。

● ボランティア・市民活動支援事業での支援活動の内容

まずは、大学の地域貢献とか大学の資源とか、このような事を簡単にお話しながら、発表を進めていきたいと思えます。

大学の地域貢献というのは 一般に、技術開発とか、特別な知識など 理系のイメージが強いと思えます。「文系の学問というのは先生達が勝手に訳の分からない事を行っているんじゃないの」と皆さんに思われがちですが、僕は文系の人間ですから、文系ならではの地域貢献のあり方をお話したいと思っています。

大学の支援の一つには専門知識というのがあります。大学の資源には、教員や学生といった人材ばかりではなく、建物もあります。こうした資源をお貸しできるというメリットがあります。あとは公共性ですよ。例えばこういうシンポジウムの場合を考えてみると、同じような内容でも喫茶店で話しているとなんだか私的な印象を持たれがちですが、このように大学で行うと、何やら格段に良い印象を受ける。僕は、実はこれを大学の公共性だと思っています。あと5年くらいはこういう考えが通用すると思っています。

今日特にお話したいのは、学生という人材ですね。総合科学部の場合、地域の活動に興味関心を持っている学生が結構いるので、NPOと一緒に色々な経験を積み重ねて行くことで、その経験が就職活動などにもプラスになって行くと非常にありがたいと思っています。大学が、地域活動に興味のある学生に、積極的にNPO活動を紹介して行き、在学中からNPO活動に参加してもらおうといったやり方も、大学の地域貢献のひとつのやり方だと思います。

文系の地域貢献・地域連携

- 調査実習
- 卒業論文

- 参与観察という手法
 - イベントやNPOへの参加

- 皆に共有できる、地域データの発信

実は私の所属している地域システムコースの場合、日常的な学校生活の中で、地域との関わる場面が沢山あります。地域システムコースでは調査実習と卒業論文は必修です。そこでは地域の事をやりますから、学生達が皆さんのところに聞きに行くということになります。現在は、大学は地域社会やNPOとの関わりが余りないので、それぞれが独自にネットワークを作って対象となる地域やNPOを手探りで探しています。しかしながら、それぞれのNPOの活動に関する情報を大学できちんと把握していれば、学生のほうからこういう事をしたいという申し出があると、じゃあここへ行ってみてはという情報提供が可能になります。卒業論文の場合も同じでこのように地域と結びつくことが大学自身にも非常に高いメリットとなります。

あと、僕は先ほどのお祭りの場合のように、実際にその活動の中に入っていくという「参与観察」という手法を得意としております。実際に関わる中で研究を行っていくというのが非常に大切で、直接関わる事によって現場の皆さんが思っていることが分かってきます。それを僕が、研究発表の場で代弁している事になるわけです。それじゃ皆さんが前面に出て話せばいいじゃないか、ということになるのですが、皆さんはたぶん、1つの活動をやっていっしょやる。僕達は複数の活動を調査してまとめていくという方法で、この集めた情報を、情報交換として皆さんのほうに提供出来るのではないかと考えております。私たちのところが積極的にその情報を出していくことで、地域貢献ができるのではないかと、というふうに考えております。今日受付に置きましたCD-ROMも、そういったこちらからの情報発信としてお配りさせて頂きました。こういった情報を、皆で共有できる地域のデータベースとして発信して今後につなげていこうと考えております。

昨日、阿部さんが報告の中で、自分はパワーポイントが出来ないみたいなことをおっしゃっていましたが、例えば阿部さんのところにうちの学生がインタビューに行った時に、お返しとして、阿部さん用のパワーポイントの原稿を作成する。パワーポイントの使い方を簡単にアドバイスすることによって次の時は使えるようになる。その原稿の最後にでも徳島大学地域貢献、とかいうのをつけてくれると徳島大学のprestigeも上がるかなと思っています。基本的に文系の情報化支援とはこの程度のレベルです。昨日の話も聞きながらこんなふうなやり方でいけるのかなと思っています。今日お配りしたCDも、家内工業的に焼いたので完成度は低いのですが、こんな感じでやっていきたいということをお知らせする意味でも、今日お配りしております。

では、総合科学部の特徴ということで、少しお話します。僕は4月から来たのでよくわからないのですが、第一の特徴は、何故か学生は公務員志向が多いということです。公務員は安定しているからと、ちょっと間違った事を考えているのが多いので問題ですが・・・、僕は、今後は公務員だからといって決して安定しないと言っています・・・。僕が個人的に思っている公務員像としまして、残業を一秒もしない、五時以降は仕事を終えて、まち作り活動に専念するような「改革型」の公務員を作ろうと考えております。潜在的にうちの学生はこの「改革型公務員」としてまちづくりの担い手になるのだと、私は勝手に考えています。学生時代からボランティア活動に関わっていれば、無趣味な人間なんかできないと思います。会社よりもたぶんそちらの方が面白いので、9時5時で働き、5時以降は楽しいことをやる。そういうふうな学生を育てていきたいと考えております。僕は学長ではないので、まずは自分のところの学生数名ずつしか育成できないのですけれども、まあ、年に3人でも10年たてば30人出来ますので、こつこつ頑張っていきたいと考えております。

総合科学部の学生の特徴

- まちづくりの担い手の可能性
- NPOの潜在的な人材？

- 個人的な野心
 - 今後の基礎自治体の改革型公務員を育成
 - パートナーシップ型のまちづくりを、学生時代から体験

これまでやってきたことは何なのかということで、このスライドを見てください。基本的には皆さんに呼んで頂ければ、どこにでも顔を出しますので気楽に呼んでください。僕の場合は隣にいる中村さんが声をかけてくれまして、吉野川フェスティバルとか、川に学ぶ体験活動のお手伝いをさせていただきました。非常によかったのは、企画段階から、ご自宅等で開かれる会合に中村さんが呼んでくれたことです。普通は、企画の段階から、お声をかけて頂ける機会は少ないと思います。学生のほうが経験不足ということで仕方ない面もあるのですが、普通はこうした活動のなかでは、学生を椅子運びなどの要員としてしか見ないところがあります。ただ、これでは全く面白くないので、学生の方も1回参加したら、2度と参加したくなくなります。そうではなく、1番楽しい企画のところから参加していくと、自分も関わっているという自覚が生まれ、実際のイベントの時も喜んで参加するようになります。学生を企画段階から参加させるのは面倒くさいとか、参加させても間抜けな意見しか言わないからと、気乗りしない面もあるかもしれません。しかし、パートナーシップ型のまちづくりの時と同じで、道路を作るときに、行政が、はじめから道路を作るのが決まっていて、人を呼んで一応意見だけ聞きました、というのと全く同じで、皆さんが行政側に普段やられているのと同じことを、学生にしていることになるんですね。われわれ教員も学生に対してそのようなことやってしまったりすることも多いのですが、やはりその企画段階から声をかけて一緒にやっていくと、学生の方も楽しいですし、大変勉強にもなります。どうせ呼ぶなら、最初から気楽に呼んでいただけたらいいなというふうに思っております。

では学生が活動に参加する効果として、どういうことがあるのでしょうか？ 例えば吉野川フェスティバルなどで、学生が参加するとちょっと華やかになります。場がちょっと華やかになるという効果ぐらいはありますね。あまり期待されては困りますが、学生が参加することにより、その交流の中で、お互いが新鮮な刺激を受け合うと思います。学生の側も普段は学生同士しか話をしないので、非常に勉強になると言っています。僕が学生を出してよかったと思ったのは、授業のレポート課題に、吉野川フェスティバルへの参加体験記を選び、予想以上に内容のあるレポートを書いてきたときです。現場の体験を通じて物事を考えるということは、僕が講義の中で話すより、ずっと教育効果が高いのだと感じています。人材を大学だけでなく地域全体で育てるという体制を作っていけたらいいかなと思います。それが生活の豊かさとか楽しさにつながります。東京などの大都市だと、文化の担い手になろうと思うと、芸能人とかテレビ局の人とかの特別な人じゃないとなれな

いのですが、じつは地方のほうがチャンスが多く、学生でも誰でもなろうという気があれば文化の担い手になれるのです。僕はこのことは、徳島大学にとっては絶好のチャンスだと考えています。学生のうちから一緒にやっていく、やりたいことを見つけて、そしてそれが就職に結びつく、そういう地域との協働関係があっていいと思うんですね。学生なので、卒業することで人材が抜けていくという問題も確かにあるのですが、そういう学生がいて良いところに就職したりすると、10年ぐらいはかかるかもしれませんが、徳島大学は優秀な学生を輩出する良い大学だという評判が出てきて、僕はそのうち京大に勝とうと思っているのですが、将来NPO活動をしたい人は徳島大学に来るというふうにしたいと思っています。

● ビデオアーカイブ構想

うちの樫田が、エスノメソドロジーという研究をしていて、研究の特徴として対象者をビデオ撮影してその映像を元に分析を行うので、地域システムコースにはビデオカメラが11台ほどあります。今後やろうとすることで、そのビデオを使って、いろいろ撮影して、ビデオアーカイブを作ろうと考えています。いろいろなNPO活動などを撮っておいて大学の研究室に保管し、例えばNPOフォーラムとはどういうものなのかとか知りたいときに、ダイジェスト版として3分くらいのもので作って、皆さんにそれを見て頂けたら、身近になってきますよね。そういうものを蓄積していきたいなというふうに思っております。

今後やろうとしていること

- ビデオジャーナリスト構想
- ビデオアーカイブ構想
- NPO,行政関係者にも共有できるプレゼンテーションの為にソフト作製
 - 新町川周辺の開発
 - 吉野川流域交流

あとはNPO、行政関係にも共有できる、プレゼンテーションのためのソフトのづくりを考えています。例えば、新町側周辺をどのように開発してきたかという共通するデータがないということで、「新町側3D地図」というものを簡単に作ってみました。新町川周辺を、どのように開発してきたかという事を知るための、統一的な資料というものも、やはり実際には、今後新町側の問題を考えていく上で、必要となってくる共有データだと思います。そういった情報の整備も、大学がそのノウハウを利用して、地域に提供出来るものと考え、今回こうしたCD-ROMをその方法紹介という意味で作成してみました。他にも、吉野川の流域交流が重要だということで、そのイメージのアニメーションを作ってみました。

実際に作成したのを見て下さい。新町川の護岸がどのように開発されたかを示す全体的な資料が不在なので、自分たちでつくってみました。これらの基本的となるデータは僕が自分で調べたのではなく、実は市役所と県庁にデータをもらってきました。そ

のときの役所の方々の対応は非常に親切でした。僕の東京の感覚だと普通、文系の方の芸術関係の人は市民に親切で、河川局の人はだいたいが無視すると思っていたら、実はそちらのほうが親切で、資料を出してくれて、それを借りてあとちょっと手を加えただけで完成出来ました。これは新町川の3D地図というものです。あとで紹介しますが、うちの大学にはGISという地理情報システムを扱える学生がたくさんいて、その子達の手を借りて作ってみました。基本的には、護岸工事がどういう順番で出来たかということを考えて作りました。3段階に分けて、こういう立体地図が出せます。赤いところが公園で、青いところが護岸ですね。もっと気合いを入れると、これらを写真で出来るのですが、そこまでやると大変なので今回はこのレベルで止めておき、来年再来年に向けてレベルアップしてゆく予定です。最初はこれで、次の年になるとこういうふうに広がっていったということを表しています。最後にはあかりプロムナード計画で光がこういうふうになっていったということで、これは県庁や市役所で頂いた情報をみて直していただくだけです。ちょっとこういう形で作り直してみると分かり易くなるかなと思いました。これからは、いろいろなところに写真を入れて、昔と後みたいなの比較出来るものも作っていき、行政の方達が使っていけると、われわれの方としても大いに地域貢献ができるのではと考えております。学生の方もこういうものを作ってただ学内で発表するのではなく、学外の皆さんに使っていただいたり、学外での発表の機会を得ると、学生の自信につながってゆくので、私としても非常にありがたいと思っています。

そういう意味で僕は、こうした学生を輩出してゆき、このようなことを頑張った学生が良いところに就職できて、社会の側でも、こういった学生が徳島大学の学生であると認知してくれて、学内でもそういう認知が行き渡ってくると、僕のほうへの協力も得られると思うので、ぜひ応援していただきたいと思います。あとは新町川をいろいろな角度から見てきたもので、どちらかというと新町川のプロモーションビデオ的な感じなのですが、こういうのが自由にできるので、こういうのがあるだけでもだいたい町のイメージとかの可能性が出てくると思うのです。大学にはこのようなソフトを使う能力があります。どういふふうに使いたいとかを言うだけであれば運用する能力はこちらにはあるので、アイデアを皆さんに対していただいて、一緒にやってくればよいと思っています。興味をもつ学生がでてきて、それが卒業論文のテーマになると非常にいいし、即戦力になります。たぶん皆さんがこういうのが必要だということを知って、実際に作るということを大学時代に経験することは、うちの学生の半分くらいは徳島以外からの出身なので、将来、徳島県外に出て行ったときに、学生時代にこのようなものを地域と協働して作り、非常に喜ばれました、といったことを言えることがプラスになって、就職にもつながっていくのだらうと思います。うちは大学院に行くよりは就職組が多いですから、やはり学生達の武器になるのは地域の現状を知っているという、先程の話にありましたように即戦力というものですよね。NPOと関わることで地域の五年十年後の先が見えてくるので、そこを握れると僕たちとしては非常にありがたいのです。

● 付録CD-ROMには何が入っているか

次に吉野川流域交流ということで、次のスライドを見てもらいます。これは僕も参加したのですが、新町川を守る会で早明浦ダムに行き草刈りをした時の様子です。徳島大学だから徳島だけというのではなく、広い流域を考えようということで、吉野川の下流から上流までのイメージビデオを作り上げていくといいかなって思って作ったのが、このアニメーションです。本当ならば、うちは芸術の先生がいるので音楽をつければいいのですが、今は開発段階ですので、この程度です。最初は、新町川の説明をして、流域交流が重要ということの説明をして、そして上流の早明浦ダムのところで草刈りを行っているビデオを作ろうとおもったんですけど、大変だったのでやめ、今回は簡単に作り上げました。私の今の野望は、流域紹介ということで流域をたどって、近くを通ったところで、そのNPOの紹介をしていくというように、その流域レベルで吉野川流れのなかで紹介のプロモーションビデオとかが出来たりするとおもしろいなというふうに思っています。

-ROM



- まとめに代えて：大学の役割

るといって、何故か信頼されるという事があります。最近、NPOが認知されてきて、多少市民権を得た感がありますが、未だに個人の利益のためにやっているのではないかと、いらぬ中傷というものを受けることが多々あります。それが、大学と一緒にやっていると、偏見を持たれず良いことをやっていると思って頂けますので、皆さんが独自にやると邪魔されてしまうようなことでも、大学と一緒にというスムーズなケースもあります。それも大学の地域貢献かなというふうにご考へておられます。

まとめ 大学の役割

- ・ 大学は活動の場を提供
 - 大学への信頼を成果へ結びつける
 - ・ 一緒に活動することで、邪魔されないで、ものごとがスムーズに進む？ 成果が出やすい
 - 学生を媒介とした相互交流
 - ・ 大学、地域で学び生活する学生を形成
 - 必要とする人材の育成
 - ・ 将来のパートナーシップ型のまちづくりの担い手を育成

あと大きいのは、学生を媒介とした相互交流があると思います。大学は学生を教えるわけですが、NPOも今後の人材を育てるという点で、人材育成に大学と一緒に関わっていくのが、今後の地域社会の姿ではないかと思ひます。僕は、例えば「地域社会学」という授業を担当して、手抜きになっちゃうかもしれませんが、本当は15人くらいのNPOの人が授業に来て15回講演をやって、私はただその授業のコーディネイト機能を果たすだけのほうが、僕が直接15回授業をするより、学生受けが良いのではないかと思ひます。実際僕の授業ではゲストスピーカーみたいな形で何人か呼んでお話ししてもらっています。こういう人材が必要だとか、こういう社会になっていくとかいうお話を、僕が話しても、先生が話していると感じるだけで終わってしまうのが、皆さんが話していくと、ホントにやっていると話すという迫力があるので、学生が感化していく部分があります。そこで学生を媒介とした相互交流ができるかなと思ひておられます。あと必要とする人材育成ということで、われわれは研究をメインにしていますが、学生の教育ということも非常に重要であり、人材育成ですから、やはり将来にNPOに携わり、パートナーシップでいろいろなところと一緒にやっていると、結果的に我々を役立たせることになるので、大切な事と考へておられます。皆さんと、この人材と一緒に作るということで、パートナーシップを結んでいけると、ありがたいと思ひておられます。

最後このCD-ROMの説明をさせていただきます。本日のプレゼンテーションで流した松崎さんのビデオは、昨日完成したので、掲載許可を得る時間が無く、この中には、はいつておられません。このCD-ROMの中味はどう使っていたかご心配ないのですが、著作権は個人にありますので、使用の際にはご連絡いただければ対応致しますのでよろしくお願ひいたします。長い間ご静聴ありがとうございました。

榎田：どうもありがとうございます。ご質問を受けたいと思ひます。ご質問がありましたら、マイクを持って伺います。中村さん、パネリストとしてご感想がありましたらお願ひいたします。

● 中村英雄氏からの要望

中村：私もはじめて見させていただきました。大学というのは私どもにとっては、なかなか敷居が高いものですが、矢部先生が半年前から私どもの活動に参加してくださるようになり、川の掃除とかを一緒にして頂き、また、川で学ぶ体験活動全国大会をしたときにも、一緒にお手伝い頂きました。その時も昨日のような交流会があって、一緒にお酒を飲みながら話をしていくという場がありまして、信頼関係を築いていくにあたってそうした機会を重ねていくことにより、信頼関係が築かれていったのではないかなと思います。これからは、大学生に手伝ってもらうときには、最初の企画段階から参加してもらう事が必要かと痛感しております。今後徳島において、「川での福祉と教育」という全国大会が再来年くらいにあり、それも先生と一緒に関わって頂くようお願いしようかなと思ってまして、先生のほうもしようといってくれておりますので期待しております。それと吉野川の流域連携野問題、やはり流域の悩みとか課題とかがありますので、こういう課題がある、それがあつたら私たちのほうもこういう事を手伝いましょう、と一緒に中に入り込んで、お互いに助け合っていく事ができたら、ものすごく良い町が出来ていくと思っております。その活動でも、大学とも連携して一緒にやっていく事も可能かなと思っております。大学の中でも勉強して、外にでたあとでもそれを役立てていって頂けるのではないかなと思っております。今まで大学というところは、なかなか敷居が高かったんですけども、今日のこれを機会に、これからぜひご協力お願いいたします。

3) 本郷澄子氏発表：「福祉系 NPO の立ち上げの苦労」

樫田：ありがとうございます。では、第三報告です。時間が押していて恐縮なのですが、最後の第三報告になります。四国大学短期大学部の本郷澄子先生です。NPOの組織が、6割くらいが福祉系といわれるなかで、今までの第1報告、第二報告は福祉系ではなかったわけです。それで、ここではじめて福祉系で報告を頂くということで、四国で活動しているかという事をお聞きしたいとお願いしております。では第三報告の本郷澄子さんです。

本郷：只今ご紹介いただきました本郷と申します。座って、話させていただきます。私は今ご紹介いただきましたように、四国大学短期大学部生活科学科生活福祉専攻で教員をしております。まず、生活科学科について、少しアピールさせていただきます。ここは介護の専門職であります介護福祉士を養成するところでもあります。ここで私は教員をしながら、もう一方地域の中で、NPO法人である「YOU&ゆう」の理事長をしております。2足のわらじを履きながら地域の方や仲間達に支えられて何とか、一年が過ぎました。活発に活躍されている皆様に前にして、今日私がここで発表することを心苦しく思って、一度はお断りしたのですが、福祉系のボランティア活動の苦労話をとということでしたので、それだったら何か、お話出来るかなと思ってお引き受けいたしました。今回、この発表原稿をまとめる中で、苦労と思っていたことが決してそうではないということ、改めて気づくことができました。これらのことも含めて、お話しさせていただきたいと思います。発表内容が、タイトルと少し変わるかもしれませんが、その辺はご了承ください。

私たちのNPO法人は、2002年12月16日に徳島県下37番目のNPO法人として認証を受けました。皆様のお手元に配布しております資料の中に書いておりますので、これに合わせてお話をしていきたいと思っております。

④NPO法人YOU&ゆうの事業内容

●宅老事業

- 難病患者・高齢者・障害者および家族のサポート事業

●介護セミナー事業

- 生きがいセミナー事業
- グループホーム事業
- シンポジウム・講演会の企画・開催
- 広報事業
- 子育て支援事業
- その他この法人の目的達成のための必要な事業

まず、NPO 法人の活動分野別表がありますので、ご覧ください。次は私ども「You&ゆう」の誕生の経過をお話したいと思いますので資料をご覧ください。次に、私どもの活動の目的ですが、北島町やその近郊に住むお年寄りや子供、障害者やその家族に対してということで書いてあります。次に4番目ですけれども、私どもの事業内容はそこに書いてありますけれども、今現在行っているのは在宅事業と介護セミナー事業です。「宅老所」について、何故「宅老所」というのかというと、そこに書いてありますが、福岡県の「宅老所よりあい」から名付けられたと言われております。

次は 私どもの活動状況ですが、宅老事業としての富山の”このゆびと一まれ”を参考にした方式をとっております。資料をご覧ください。次は私どもでやっている介護セミナー事業ですが、6回シリーズで行っております。

次に私どもの抱えている問題についてお話を少しさせていただきます。私どもが事業を展開していく中での問題点としては、第一に人材面があげられます、やはり皆さんも同じだと思いますけれど、人材の問題と申しますのは、私どもの中心となる理事の多くは、仕事をもちながらもこの事業にかかわっておりますので専従はおりません。当初は協力して下さるボランティアもおりましたが、運営にかかわる者とお手伝いという色々上下関係などが発生いたしまして、スムーズにいかなくなって、何人かの方が離れてしまいました。そこで再確認したことは、原点を思い出して、利用して下さる方がいる限りは続けていこうということです。宅老所というのは、みんなで楽しく過ごすところということを、改めてみんなで確認しました。今まで出来なかった運営に関わる理事とか、協力してくれるボランティアさん、利用者の方を分け隔て無く、宅老所に関わる全ての人で、定期的に話し合いの機会を持っていきましょうという話し合いをいたしました。今では協力頂けるボランティアさんも何人か増えまして、現在も常勤はいませんが、交代で一日平均5～6名が宅老所に関わっています。

経済的な面ですが、会員収入はこれですと申し上げたかったのですけれども、あまりにも恥ずかしいので報告だけにさせていただきます。会員収入、委託金、介護教室の委託金収入、それと宅老所の利用料一日500円が収入源となっております。ちょっと厳しい状態がおわかりいただけるかと思えます。最近になって利用者の方が、楽しいので回数を増や

してほしいという要望がありました。このことはとっても嬉しいのですが、先ほど申しましたように、人材が交代で関わっているとか、それから経済的な基盤がなくて人を雇いたくても雇えない状況で利用者の希望に答えられないという厳しい現状があります。

利用者の要望に応じていくためにはどうしたらいいのかという点では、専任のスタッフが必要、もう一つは会員の拡大とか、助成金等の獲得などがあげられます。この1年間は、あくまでも、ボランティアでやってきました。

でもこれが限界です。早急にしなければならないことは、介護保険事業への参入をすることとして現在一人の理事の自宅を改築して、通所介護事業所への申請に向けて本年度中に、来年1月からは開所できるようにがんばりたいと思っております。このような現状です。

これから、この1年を振り返ってみますと、私は理事長としては名ばかりで、ほとんど他の理事におんぶに抱っこということでもかせておりました。

私自身が一番責任を感じたというか辛かったことは、やはり数人の協力者が離れていってしまったときです。人手が足りないという時に、他の理事は何とかそれを乗り越えようとして頑張っていたのにも関わらず、私自身が教員という仕事を持っていたものですから、身動きとれず、理事長としての役割を果たせないまま他人まかせにしてしまいました。このとき二足のわらじをはいては、どちらにも責任がとれず、厳しい現実を目の前にして改めて感じ、どちらかを選択しなければならないと悩んでおりました。私は昨年までは、非常勤でございましたので、丸一日関わることも出来ていました。しかしながら、この一年間は常勤でしたのでほとんど動けない状況でしたが、そのなかでもなんとか金曜日の午後が動ける状況でしたので、7月から今までは水曜日にあった利用日を金曜日に変更しました。それも利用者の方にお聞きして、こういう状況だから変更してもかまわないかということで、皆さんのご協力を得まして、ようやく変更致しました。それでも厳しい現状が続いておりますが、何とか今までやってきております。

⑨YOU&ゆうの運営上の問題

利用者の要望に応えられない

- 専任スタッフの不在 → 専任のスタッフの雇用
- 経営基盤の未確立 →
 - 会員の拡大
 - 委託金・助成金等の獲得
 - 介護保険指定事業所参入
(本年度中に申請)

今回このような機会をいただき活動を振り返る中で、NPO法人「YOU&ゆうの理事長と教員としての役割」について考えさせられた事がございましたのでお話をさせていただきます。私の大学では教員が他の仕事を兼任する場合は、兼任届けを提出いた

します。それを提出すれば許可がおりて兼任が可能となります。授業のない日、私の場合は金曜日の午後がそれに該当しましたので、兼任届けを出して研究日という形で、宅老所にかかわることができるようにいたしました。

次に「介護について」の啓蒙や普及をしていくために介護教室を地域に広めていこうと町より委託をうけて介護セミナー事業を行うことにいたしました。その講師陣に、私どもの理事だけでなく、大学で介護技術のご専門の先生にご協力をいただき、質の高い介護技術をおつたえする介護教室を運営することが出来るようになりました。地域のかたからは、先生方が丁寧にご教えて下さると言うことで大変喜ばれまして、来年も町から依頼を受けておりますので、来年の経済的な見通しも生まれているといえます。

次に宅老所が学びの場だけでなく、学生の「居場所」となっているということについて今からお話させていただきます。私どもの大学は本日学園祭です。そこで学生が、「障害者とファッション」というテーマで、今研究発表を行っております。その研究の為に9月頃から、私どもの月一回の第三土曜日に開設しております障害者を対象にした宅老所に2～3人の学生が研究テーマを持って参加しております。そこで障害者のかたとか親御さんとお話をしたりして協力いただきました。障害者にとってファッション・おしゃべりってどういう事なの？などの素朴な疑問や質問をしたりいっしょに遊んだりする中で、信頼関係とか人間関係が生まれてきました。福祉を学ぶ学生でも、最近は本当にコミュニケーションが不足しており、どうやったらコミュニケーションがとれるだろうかということが大きな悩みなのですが、この機会を利用して障害者と関わるなかで、歌を歌ったりゲームをしたりする中で、自然に学生は障害者との関わり方を学ぶことができたようでした。学生は「先生、当たり前のことでしたらいいんだね」ということを学び、それらの中で学生は宅老所での居場所を見つけることができました。学生は、現在時間があれば月一回の宅老所にきて、楽しく遊んでおります。現場で学生の様子をみていると実践の場で学ぶことの大切さを改めて再認識することが出来ました。

三番目ですが、学生が有償ボランティアとして活躍しているというお話をさせていただきます。宅老所にきている障害者の親子は、この2月から月一回宅老所を利用していました。いつか自分たちも障害者の宅老書所のようなことをしていこうと思っていたようです。そこで学生との関わりができ、ボランティアとして協力者をえることでレスパイト事業を行うことになりました。まず、8名の学生が有償ボランティアとして登録し支援することになりました。10月18日にはじめて行いましたけれども、障害者の親子、学生、そしてわれわれも参加して20数名の方が集まってきて楽しい時間を持つことが出来ました。

● 大学と福祉系NPOとの関わり

これらをまとめてみますと、「大学側の教員の地域活動を支援する協力体制がある」ことと、大学には「学生や専門職の職員などの人材が豊富にある」これらのことを大学側が、地域やNPOに対して支援できることではないだろうかと思えます。これらのことが、理事長と教員という両方の立場をもっていたからこそ、容易に結びつけることが出来たことを改めて気づくことができました。大学側に得られる利点としては、学生の学ぶ意欲を引き出すということだと思えます。学生をボランティア活動に参加させることによって、地域社会とのつながりを深めさせ、視野を広げさせる事が出来るのではないかと思います。さらには、それぞれの学生が持つ能力を引き出す可能性も出てきます。

私は、宅老所で関わってくれる学生を見ていく中で、これが本当の教育なのではないかというようなことを感じました。私は一年間宅老所の理事長として活動を運営していくこと、何とか地域に根ざしていきたいということにだけに精一杯だったものですから、当たり前の事に気づくことが出来ませんでした。今回のこの発表の中で、私はやはり理事長として、教員として地域と大学とを結ぶコーディネーターの役割をしていること、そしてこれからもして行かなくてはいけないということを改めて思いました。そう考えますと、今まで苦労だったものが苦労で無くなったというか、心の霧が晴れたようになりました。まだまだえらそうなこと言えませんが、NPOが力をつけるためには、そして地域

に開かれた大学になるためにはNPOと大学の間にはコーディネーターが必要や重要性を改めて感じております。

最後になりましたが、私どものNPOはまだまだボランティアの域を脱していない法人です。このような機会を与えていただき、別の視点から自分たちの活動を振り返るきっかけを作って下さった事に感謝致します。本当に、私自身を反省し、新しい視点で自分自身を見つめ直す機会を与えて頂きました。私どもの法人は、まだまだよちよち歩きの段階なのですが、NPOの特徴をいかしながら、何とか運営してきました。これからも二足のわらじを履いて頑張っていきたいと思っております。これからはやはり、教育と地域のNPOとの関わりみたいなものが私の研究課題ではないかなと思っております。ご静聴ありがとうございました。

⑩NPO法人YOU&ゆう 理事長と教員としての役割について

- 大学の専任教員の協力で、質の高い介護技術を提供することができる。
- 宅老所が学びの「場」だけでなく、学生の「居場所」となっている。
- 学生が有償ボランティアとして活躍する場ができる。



NPOと大学を結ぶコーディネーター役

● レスパイト事業とはなにか？

檜田：どうもありがとうございました。ポイントを絞った発表であったと思います。時間が押して参りましたので、1件だけご質問を受けさせて頂きたいと思っております。何かご質問等ありませんでしょうか。発表の中で「レスパイト事業」というのが出てきたんですが、それが良くわからなかったのですが、もしよろしければ、もう少し説明をいただけないでしょうか。

本郷：これは、地域において自宅で障害者を抱えている親御さんを対象に、先に前もってその方達を支援してくれる方を行政のほうに登録しておきます。それを使うことによって、障害者をもつ親介護負担を軽くするという事業で行政からの支援事業です。

檜田：どうもありがとうございました。2時間以上続けて聞いて頂きありがとうございました。休憩に入りたいと思っております。休憩を15分間予定していましたが、10分間に短縮させて頂きまして、3時55分から再開とさせて頂きまますので、よろしくお願い致します。

(3) パネルディスカッション

以下は、パネルディスカッションの記録である。パネラーは、齋藤雅治・矢部拓也・中村英雄・本郷澄子・饗場和彦・麻野新一の6氏であり、フロアからの発言者は、阿部圭宏・寺尾俊喜・平井松午の3氏であった。

檜田：予定の時間になりましたので再開させていただきます。先ほど発表して頂きました四名の方に加えまして、徳島大学総合科学部教員の饗場和彦氏、NPO法人『さわやか徳島』

理事長の麻野新一氏を加えて、パネルディスカッションを進めていきたいと思います。簡単に結構ですので、自己紹介のほうよろしくお願い致します。

● 饗場和彦氏と麻野新一氏の自己紹介

饗場：徳島大学総合科学部の饗場と申します。私は国際政治学を担当しております、その一環で国際協力についても勉強しています。今回発表された中では齋藤さんの話題と一番近いところにいます。

麻野：「さわやか徳島」の麻野でございます。「徳島NPO連絡会議」の代表もさせて頂いております。「さわやか徳島」は 本日の資料にも載っておりますように、在宅福祉を行っております。他と違うところは自宅を開放して小さな所帯ですけれども、在宅福祉活動、ヘルパー研修、NPO 団体あるいはNPO 法人の立ち上げとか、情報交換とか、いろいろな活動をしております。一つよろしくお願い致します。

● テーマの確認

榎田：ということで、これからパネルディスカッションを行っていききたいと思います、少し時間を延長させて頂きました。全体として時間的に約40分を使う予定です。テーマのほうを確認させて頂きます。テーマは冒頭申し上げましたとおり、「力あるNPO作りのためにできること」という設定をしているのですが、とりわけ若者や大学、あるいはNPOの外側にある資源というものをどうやって活用してNPO活動を進めていくのか、あるいは協力しあっていくのか、というようなことがテーマだったかと思います。そういう観点で課題の確認が出来ると議論がしやすいのではと思います。こういう課題でこういうふうに進んでうまくいっているという形に、もう一回課題の確認ということで、発表者のかたに順番に伺うことで課題の確認と議論をはじめるとしたいと思います。最初に発表をお願い致しました齋藤さんから、私たちは資源の活用とか若者の活用とかいう面でこういうふうに進んで考えかつ乗り越えている、あるいは、努力しているというようなお話を頂きたいのですが、いかがでしょうか。お願い出来ないでしょうか。

齋藤：ピース ウィンズ・ジャパンが、どうなしたかと言うことですが、実はうちで働きたいという方が非常に多く、ところが彼らが、うちで即仕事出来る人材かという、必ずしもそうではない。国際協力あるいは国際的な舞台で活躍したいと思う方は一杯いて、そういった方々がうちに応募してくださるのですが、実際現地に行って仕事を任せられるレベルの人材というのは、なかなか確保出来ないという現実があります。ですから、実際そういう国際貢献をやりたいという人が、ただ単純にやりたいということだけでなく、どのようにして組織に入って役に立つ基礎的な能力を身につけていくかということが大事になってくるかと思えます。我々の活動というのは、やっぱり基本的には一般の民間の方々が変わらず、いわゆる基本的な事務処理の能力ですとか、通常に仕事をするにあたって最低限必要な能力というものが必要とされると思えます。国際貢献というご自分がやりたい事とはちょっと離れるのですが、この分野を志望する以前の問題として、仕事出来る人材として、そういった基礎的な最低限必要な能力を身につけた人材が必要とされると思えます。我々のほうとしても、そうした人材がうちに来てくれるといいかなと思えます。

榎田：ご発表のなかにも経験のある人がほしいのだけでも、経験のある人はなかなか来てくれないので、人材育成の研修にもお金を出しながらやっていらっしゃるというお話があって、その確認に半分なっていたかと思えます。もう半分は裏方の仕事の話ですね。人を外に出すときには東京の本部がしっかりしなければいけない。お金を集める為に説明責任も果たさなければいけない、その裏方の部分の人が必要なのだけどもって、二つ

ボランティアの方も海外に出している団体もあると聞くんですけども、ピース ウィンズ・ジャパンはそこを分けていらっしゃるんですよね。それから二つめは、一見裏方に見える東京事務所の仕事を手伝ってもらう、そういう仕事をやってもらうのには、アカウントビリティが大事だという話ですよ。全部で支援者三千人、ボランティアとして働いているかた250人というふうに、上手に人材を登用していらっしゃいますが、その説得の仕方なりをもう少しお話頂くのが、我々の参考になるかと思しますので、少しその辺のお話を頂けたらと思います。

齋藤：先ほども申し上げたとおり、ボランティアの方が250人いまして、そうすると、ピースウィンズのスタッフがやっている活動を超えて、ボランティア自身がこんな事をしたいとか、こんな事も出来るのではというスタッフに無い発想で、彼ら自身がアイデアを持ってきてくれるくらい、ボランティア自身がイニシアティブを持っているのです。我々がボランティアの人たちに、こんな事をやってくれないかということもありますが、彼らのほうから我々の思いもつかないような事を提案してくれて、それが、ピース ウィンズの団体として出来る場合と、ボランティア活動としてやってもらう場合と、ケースに応じて活動してもらっています。実は私どものオフィスは東京の世田谷にあるのですけれども、そこで地域の人たちにピース ウィンズというNPOが世田谷にあって、こういう活動をしているんだということを、地域の人たちに広めるようなそういう広報活動みたいなものもしてもらっています。ピース ウィンズという団体は、海外に対する支援をする団体なので、世田谷区の中にそういう団体があってこういう活動をしているということ、割と近所の人には全く分からないという状態があるので、そうした広報をしていただくと、イベントなどの時に近所の方も来てくれるなど大変役立ちます。また私どもでは、東チモールとグアテマラのコーヒーを、収益事業として、その地域の農民支援のために販売していますが、コーヒーを飲むことにより、実は東チモールでの紛争の後ようやく農民達が自立への道を歩んでいる、その支援をする事につながるという活動もしております。海外への緊急支援という割と目立つハードな支援ばかりでなく、ごく一般の人たちが、日常的なコーヒーを飲むことにより私たちの活動に参加できるんだという、そういったことを紹介してくれる手段として、ボランティアの方々も活動していただいているということです。

檜田：どうもありがとうございました。私のほうでまとめてしまうのもあまり良くないと思うのですが、実は午前の部会や昨日の話を聞いていても、活動がとんでもなく広がっていくというのが、NPOの特徴だと思うんです。今の齋藤さんのお話をきいていても、説明や支援の活動だったとも言える活動が、それ自身、表の活動になっていく、という話として伺いました。中村さんのところも、新町川だけではないわけですよ。先ほど早明浦ダムの話が矢部さんがしていましたように、吉野川流域支援に広がっていくという活動の展開があったかと思えます。問題と、問題の解決の仕方はそれぞれ似ているように思うのですが、いかがでしょうか。今私が課題として、NPOにおける若者と大学の活用を考えようというのを提出して、それに対する対策としては、じつは経験の無い人たちにもその持っている能力を生かしてもらうような活動をNPOの表の活動にしていく、というストーリーがあるという展開を描いてみたんですが、いかがでしょうか。おまえの言っている事は違うとか、じつはもっと別の面があるとかいうことがありましたら、ご自由にご発言いただけないでしょうか。ええ、まず饗場先生、お願いできないでしょうか。

● NPOのブランドイメージづくり戦略とメディアの活用

饗場：齋藤さんのお話では、ピース ウィンズではボランティア志願者が来すぎているという状態があり、本当に力のある人が欲しいんだという指摘でしたが、中村さんの話ですと、若い人を取り込んで活動を活性化させたいのだが、どうしたら若い人が来るのかという話でした。ピースウィンズに若者が集まるコツを、他のNPOにも生かせれば良いと思うのですが、それは为什么呢。齋藤さんはプレゼンテーションの中では触れていませんが、

それは、私は若者を引きつける、ある種のブランドイメージだと思います。ピース ウインズのパンフレットをご覧になっても分かると思うんですが、非常にきれいな作りですよ。HPもセンスがいい。普通、NPOといいますが、特に福祉関係の団体はまじめだけど、少し地味な、どこか野暮ったいというイメージがあったりします。そんな中でピース ウインズは、ロゴにしても、イベントにしても現代的でカッコいいというある種のイメージがあり、そんなものができる、結構若い人たちが来たがる要素になるという気がします。

ピース ウインズ・ジャパンがイメージ作りに成功している要因の一つに、メディアを使ううまさがあると思います。以前、統括代表者の大西さんと外務省のいざこざが取りざたされましたが、結果的にそれによって知名度があがり、また、それ以外でもピース ウインズのメディアでの露出は目立っています。対照的に、今回のNPOフォーラムは、メディアへの対応があまり良くなかったと思います。例えば徳島新聞の朝刊を見ても、昨日の記事が載ってはいませんが、小さいですね。これだけの方が問題意識を持って議論しているわりには、地元紙にあればいいし載らないというのは残念です。メディアを取り込むことも含めていかにイメージを上げていくか、ということも1つの課題だと思います。

檜田：新しい視点を出して頂きました。ブランドイメージ、メディア利用というものでいいですね。そのような事をお話していただいたのですが、他にも新しい問題などありましたら、その意見をお出し頂ければと思います。

● 若者とNPO

麻野：今回のフォーラムを大学のキャンパスの中で開催されたことは 実際若者がどれだけ関心を持っていたかはわかりませんが、大学生の関心を引くという目的もあったかと思います。こういう会を開いていくと、昨日のお話の中にもありましたけれど、開かれた大学の中でNPOフォーラムが開催され、色々なNPO団体の活動を知っていただくということは、これからの大学生を引きつけていく一つではないかなと思います。今まで前例がなかったので、学生の方もどういうふうに使われているか分かりませんが、今回出席した人が良かったという印象を持てば、そして、来年もしここでまた開催というふうになればもっと多くの学生が参加してくれるのではないかなと思います。私どもの団体も家庭を解放してディサービスをやっております、高齢者は10人くらいですけども、学生さんからお電話があってボランティアをやりたい、あるいは実習がしたいという申し出に対して、受け入れをし、実習に来て頂くわけですけど、日程やご本人の都合に合わせて土曜や日曜にきてもらっています。単にお年寄りの世話をするというのではなく、人生の先輩として色々教えてもらって下さいとか、あなた方はいまこんな事をしていて将来どういうふうになりたいかということなどを、一緒に人生の先輩とお話して下さい、ということをお話しております。まあ、こういうようなことをしております。そうすると、高等学校に行っていた方は、最初一人きて、1ヶ月したら友達を連れてきて、その友達がまた友達を連れてきて、というようなことで最終的には4人位になりました。で、どちらのほうに進むのですかと聞くと、福祉のほうに行きたいという話でした。福祉のほうに行くのだったら看護学校もいいわね、大学に行っても福祉系の大学があるよ、と話しました。これからはご承知のように、2015年になると65歳以上のひとが10人に一人以上いるという高齢者社会になるわけですね。我々も2015年になったらよぼよぼになっていると思います。それだけ高齢者が増えていくわけで、福祉にこれから携わっていくことは非常にいいことだと思います。そのためには体のケアは介護保険で、こころのケアはボランティアで、こういう事で色々頑張ってくださいと、言うことでボランティアとか実習をして頂いております。現場にきて頂いて話をし、それをどう将来に結びつけていくかということも、NPOあるいは団体として、若者達を受け入れたときに重要ではないかなと思います。従って、今回大学のキャンパスで開催されたということは、非常に有意義なことだったと思っております。

檜田：今の麻野さんのお話と、第三報告の話が少し似ているように思います。つまり大学で看護をやっている学生達の研修の場としてNPOを生かせるという、そういうNPOの価値を再発見したということがですね。第3報告の本郷さんの話だったわけですが、そういう第一義的なメンバーのキャッチはまず出来ると思うんですけども、そのあと続くかどうかというのがもう一つの課題だと思います。あるいはそういう人たちの問題として、先ほど齋藤さんが話された、裏方が出てこないという問題があります。表で直接支援するところはNPOの方針に沿って仲間が集まるけれども、その活動が大きくなればなるほど裏方が必要になって、その部分が確保出来ないという問題があると思うんですけども、専従者が必要だということもかなりそういう部分と関連があると思うので、裏方の問題をどう解決していくかということに話を向けようとおもうのですが、第三報告者の本郷さん、その辺、問題提起したあと、話し足りなかったように思いますので、もしあればお願いします。

本郷：運営を持続させるためには、経営が成り立たないといけないわけです。私も福祉をやっております、福祉しか知らない人間で、そういう人間が経営をやれといわれても難しいものがあります。そこで経営のノウハウを教えて頂けたらいいのかなと思います。

檜田：二日間の最後のシンポジウムになっておりまして、全体の総括という意味も含めて、会場に初日の発表もしていただきました阿部さんがいらっしゃるの、すこしうかがってみたいのですが、今話題になったことと、阿部さんの昨日の講演の中でお話しして頂いた「中間組織が必要だ」という御主張が少し重なる部分があると思います。良ければこの点に関してご意見をお伺いしたいのですが。

● 若者とNPO、理事の責任、および大学とNPO

阿部：二日間ご苦勞さまでございます。いろいろお話をされている中で、学生との関わりというのが、私も今悩んでいるところです。NPOと学生がうまく連携している、その様子を見ながらいつも指をくわえて見ているという状況です。徳島でも、島さんなどが積極的に若い人の力を生かしていこうとしているのを見て、こちらもやっけて行かなくては行けないなど、痛切に感じています。本郷さんが言われた理事の責任の話ですが、NPOに関わる理事の人たちの責任は、非常に大きいと思います。理事にそれなりの責任を感じてもらおうと、組織運営の面でプラスになると思います。

最後に、NPOに対する期待というのがありまして、NPOの人は、自分たちの活動を理論的にまとめるのが苦手ですね。例えば実践報告などを文書にまとめて発表する場面があるのですが、そういうところを、大学の研究者や大学生達にお手伝い頂けたら、非常に大きい貢献がしていただけるのではないかと思います。NPOの活動を理論化してもらおうという意味でも、大学には非常に期待をしております。

檜田：厳しいご意見もいただき、ありがとうございました。理事の責任ということで、組織を拡大して行く中で、その組織を維持する仕事が非常に大切になるわけですが、そこで理事の仕事が非常に重要になってくる、というお話だったと思います。第三報告の本郷さんはそれが大変だというお話をなさった訳ですが、その辺で、第一報告・第二報告のかたからも「理事の責任」ということで何かお話しが頂けたらとおもうのですが。

齋藤：ちょっと理事ということからずれるかもしれないんですけど、先ほど齋藤先生のお話で触れられた大西という者が我々の団体の統括責任者で、彼が自分のライフワークであるイラクのクルド人の支援を継続したいということで、組織がスタートしたわけです。それが8年もたたないうちに規模も60人というふうになっていくと、この組織がどこに行くのだろうということになってくるわけです。NGOの良い面でここに入ったら自分のや

りたいことができるという思いで、みんなが入ってくると思うんですけど、そうするとみんながやりたい事があって、そのやりたい事が色々出てくる。組織が大きくなっていく中で、それぞれの指向する方向が散らばってしまっていて、団体としての推進力がぼやけて行きかねないということがありまして、今その転機にさしかかっているのかなと思うわけです。組織が大きくなっていく中で、どうやって組織の目指す方向を定めていくかということが急速に育ってきた組織の課題かなと思います。そのときに理事であるとか、組織の中で方向性を考える者が、どうやって組織全体の方向を決めていくかが重要となると思います。

樫田：今それを会議かなにかで選んでいるという状況なのでしょうか。

齋藤：既にいま六カ国の事業をおこなっていますけれど、緊急系の事業と、開発系の事業と分かれています。イラクとアフガニスタン、シエラレオネは緊急系、東モンゴルとインドネシアは開発系というふうに分かれています。組織としては一つの組織ですから、人事異動があるわけです。例えば開発系では、5年10年という視野で事業計画を立てている訳です。一方緊急のほうでは、何か起こったらすぐ動かしたいという意識がある。そこを組織のなかで、どうにかしてバランスを取りつつ、何かが起こったときに反応できる余力を残していきたいと思っています。が、緊急な問題が起こったとしても、その長期のものを引き裂いて緊急のほうに資金や人材を割くということは決してやってはいけないことなので、緊急は緊急、開発は開発として、組織の中でうまく振り分けて行けたらなと思っており、そこが今一番直面している、そして解決していこうと思っている問題です。

樫田：中村さんのところも組織が大きくなっているところなので同じ悩みをお持ちかと思うのですが、いかがでしょうか。

中村：私はなんぼでも広げるだけ広げていって、困れば困るほどいいなって思います。困ればそれを助けていく、これをやっていこうというスタンスでやってきております。今回矢部先生が入ってきてくれたのも、こちらのほうが困っているというのがあったんだろうなと思います。これからももっと色々な事業を増やしていくのですが、その過程でそれなりの人が育っていくのではないかなって思います。事業を拡大していく、そしてどんどん困っていく、そうしていくことによって、それをやっていこうという人が増えていくように思います。とにかく、前を向いて動いていく、あまり話し合いをせずに動いていく、結果が悪ければそこで反省する、大学生が入ってきていただいても、私どものほうはいけるのではないかなと思っています。そこで失敗すれば、またそこで反省すればいいということで、その中から、また新しいものが生まれていこうと思っています。まずは行動する、動いていきさえすれば、みな楽しくいくのでは、というふうに考えております。

樫田：予定していた時間が過ぎているのですが、少し延長させていただきます。ここにいらっしゃる皆様がたは活動家でいらっしゃるって、当然今の話題に関してご意見をお持ちの方がたくさんいらっしゃると思います。何かご意見ないでしょうか。

● 私の感想（徳島市役所・寺尾さん）

寺尾：徳島市役所に勤めております寺尾と申します。いま、シンポジウムのお話の中で色々ヒントがあったかと思いますが、NPOがこういう形で皆さん集まっているということは、一つには、色々こういう場で学ぼうということと、ネットワークを作ろうという話だったと思います。実は企業においてもネットワークで動いております。そのネットワークを築くためにいままでの歴史の中で培ってきたものがあって、ネットワークの中でそれぞれが力を発揮していくということになります。NPOもこういう機会に、単体で活動せずにネットワーク化をすすめ、それぞれが連携して活動していく事を目指していくべきだと思います。

ます。ネットワーク力をつけていくことが、これからのNPO活動を高めていく事につながると思うのです。

大学と大学生の話におきましては、実は地域経済が加速度的に悪くなっていくという、この社会を立て直すためには、総力戦でやっ払いこうという話で、なおかつ社会全体がソフトの時代への転換を叫ばれておりました、ソフトの在処として大学にそのポテンシャルがあるということで、大学の先生や学生達をいかに活用するかというところが、これからの課題の一つではないかなと思います。大学生の話になりますと、例えば機関誌を作るのに、学生に任せてしまうということがありまして、任せることによって、大学生のほうでもそれをおもしろがって楽しんでやっ払いいくということがあります。NPOは21世紀の宝だと思っているのですが、若者っていうのは古代からずっと社会の宝でありまして、これをいかに利用していくか、かれら若者達の能力を、いかに社会に生かし適応させ全体で育てていくかという問題となってくると思います。我々のNPOを通じて、いかに若者達を教育していくか、地域全体を通していかに大学生を教育していくかというところに来ていると思います。いま、大学生がつくるNPOというものが、こうしたローカルなところで出来てきてもいいのではないかな。その若者達の後ろには、大学の先生達がいらっしやいますし、それだけの潜在力というものが当然あると思います。例えば大学生が社会学の総合学習の塾をやる、大学の先生が小学校や中学校で社会学の講義をする、NGOの齋藤さんみたいなかたをお招きして、世界はじつはこうなっているんだよというふうに仕組みを教えろとか、そんなことが出来てくると思います。実はNPO活動をやるそのメニューというのが不足しているのではないかな、彼ら自身社会に貢献出来るようなNPO活動を支援していくための仕組みやヒントみたいなものをそろそろ開発していくべきなのではないかなと思います。とりとめのない話になってしまいましたが、いま、お話を聞いていてちょっと思ったことを発表させて頂きました。ありがとうございました。

檜田：話を大学のほうに振られたので、会場にお配りしたカラーのパンフレットの冒頭にありますように、大学の中に地域貢献特別支援事業を行っている組織がありまして、その責任者の平井が本日会場に来ております。今、大学に期待することというコメントを頂いたので、立場上、平井さん、何かコメントをいただけないでしょうか。

● 地域貢献特別支援事業の目指すもの

平井：いま、檜田先生の方からご紹介頂きました徳島大学の平井と申します。今回は、このシンポジウムにのみ参加させて頂いておりますが、その中で少しコメントを述べさせていただきます。たぶん昨日、青野学長のほうでお話された分とダブルかも知れませんが、その辺はお許し下さい。

徳島大学の方では、この12月に社会連携推進機構という組織を学内に発足させる予定にしております。私もその設置準備会議の一員として、この機構の立ち上げに参加しております。従来の大学は、教育と研究を中心とした組織だったわけです。そうした中で、勿論法人化という流れの影響もあるのですが、地域社会への貢献ということが昨今大学に求められており、徳島大学もその対応として社会連携推進機構を立ち上げることになっております。この中には、地域連携推進室と国際連携推進室という2つの組織が出来形になります。地域連携推進室の方は、現在徳島県や市町村との協議会を発足させて地域貢献特別支援事業というものを展開しております。今回の、とくしまNPOフォーラムにつきましても、檜田先生を中心にシンポジウムなどを開催させて頂いております。もうひとつの国際連携推進室につきましても、徳島大学では、たくさん留学生が来ておりますので、そういった留学生を通じて、あるいは国際的な共同研究を通じての連携を進めていこうと思っております。社会連携推進機構では、地域にかかわること、あるいは国際問題にかかわることでの地域からのニーズをこちらに寄せて頂きたいと思っております。徳島大学に対して今過大な期待を頂きましたが、徳島大学の医療系は充実しておりますので、そうい

った期待にお答え出来る部分があるかとは思いますが。その一方で、例えば先ほどからお話のある福祉系の場合、徳島大学はこの福祉系の分野では弱い面があります。そういった場合には、例えば四国大学さんのほうからそういったノウハウをご教授頂くといった、大学間での連携も必要かと思えます。

徳島大学の社会連携推進機構や地域連携推進室について少しご紹介させていただきましたが、徳島大学では、皆さんのニーズをいろいろ考え、こういったことをやっていただけないかという皆様方からの要望があり、学内にその適当な人材やスタッフがおりましたら、紹介していきたいと思っております。先程、実際に矢部先生がGISの器機を使って編集したビデオを見せて頂きましたが、この作成に携わったGISの教官も、学内でそういった要望がでてきて、GISの教官を採用することが出来たわけです。ですから皆様方の声が徳島大学に強く寄せられれば、大学の方でもその要望にお答えしていけるのではないかと考えておりますし、われわれ自身も地域連携・地域貢献に期待しているところもあります。

あと、もう1点だけ触れさせていただきたいのですか、さきほど饗場先生の方からお話しもありましたが、われわれも情報の発信ということについて考えていかなければならないのではと思います。私自身は大学内の社会連携事業のほかにも、学内外で色々な社会活動をしているのですが、学生達はそのことをあまりよく知りません。実は、私どもは自分たちの活動していることをあまり宣伝していない部分があるのではないかと、ということに気がつきました。そういった面を考えると、大学もそうですし、われわれ自身ももう少し情報を発信して、社会にこのような形で貢献しているのだ、ということアピールしなければいけないような気がします。そういうようなことを進めていく中で、地域社会の意識も高まっていき、大学のこうした社会貢献の活動に関心を向けていただけるのではないかと思います。そういった意味では、今回の徳島大学を会場として「徳島NPOフォーラムのシンポジウムを開催した」という自体、大学にとっても地域連携・社会連携の観点から大きな前進ではなかったかと思えます。

榎田：どうもありがとうございました。先程からGISという言葉が出てきましたが、「ジオグラフィック・インフォメーション・システム」、日本語になおしますと「地理情報システム」というのでしょうか、ポイントポイントにいろいろな情報を重ねて入れて表示するシステムです〔GISとは、Geographic Information Systemの略。デジタル化された地図情報とデータベースを結びつけたコンピュータ・テクノロジーによる新しい空間解析システムのこと〕。徳島大学は全国でも数少ないこの分野に力をいれて研究開発をしている大学のひとつです。

それでは、先に山中先生の方から総括をしていただきます。その後で発表者の方から一言ずつご発言をいただき、このシンポジウムを終わりにしていきたいと思えます。山中先生お願い致します。

● 総括：人が人を呼ぶ仕掛け作りを！

山中：最初に私が提示した課題に対して、皆さんからいろいろなお考えを発表いただきました。その中で気になったのはピース ウインズ・ジャパンから来られた、齋藤さんの「経験がある人」が欲しいのだが、来る人たちは経験がない、ですから、そこで経験をつけなければならない、という現実です。それはどこの世界でもある問題だと思います。その経験をつけさせるという責務を担っていたのが、大学だったわけですが、何故か大学が出す人間が信用されなくなってきた。そこで大学も危機感を感じて、何とかして使いものになる学生を出さなくてはならないという、現実には直面したわけです。何とか皆さんの期待に添えるよう貢献をして皆さんとおつきあいをしに行かなくてはならないという、大学側の堅い思いがあるわけです。これからの社会は協調的でなければならないといわれますが、それはそれぞれが悩んでいることも、思いきって大きな声でいう社会であるというふうに

私は思っております。「助けてください」ということを大声で言いあう社会だというふうに思っております。そうすれば、誰かが助けてくれる、というふうに、皆が大きな声で言い合える世界になれば、たぶんみんなが手伝ってくれる。どうしてもそれが言えなかったのは何故か、あるいは言う相手が行政しかなかったのが今までの世界だと思います。それが今までの話の中のキーワードではなかったかと思えます。そのためにはいろいろなメッセージがあると、それからブランドとおっしゃいましたが、どういうところに行けば何ができるか、ちゃんと分かるということだと思います。そういうブランドが必要ということです。そういうものを大学が作っていくことが非常に重要だと思えました。

実は一つ悩んでいたのは、例えば、大学でボランティア活動を推進するといって、必修授業にしてそこに学生全員送り込みましょう、といってこういうのを良くやるのですが、そのことで悩んでおります。本当にそれでいいのかという疑問を持っています。例えばボランティアに携わる方々に講演を頼んで授業を組みます。果たしてそれで使い物になる学生を送り出せるか、疑問に思っています。大学の中でも、やるべきだと言う人と、さっきの発表の中にもありましたように、もっと自主的に任せるべきだという意見もあります。一人の学生がボランティア活動に関わったらその学生がもう一人連れてきてくれる、そうやってどんどん輪が広がっていく、というお話がありましたが、確かにそれも一つの道かなと思えました。そういう人が人を呼ぶような仕掛け、これを大学側も考えて行かなくてはいけない、また、大学の教官も反省して、変えていかななくてはならない面かなと思えます。これから大学が組織としてどうやってそういった面を考えていかなければならないか、一つの課題だと思います。あまり総括になっていないのですが、感想を述べさせていただきました。

最後の発表者が言われた大学で作るNPO、大学の教官もNPOに関わっていかなければならない、ということも今後考えていかなければならない点だと思います。困っていることは困っていると大声で言い合いましょう、このフォーラムがそういう場になっていけば、助け合いの輪が広がるのではと思っております。以上、簡単ですが総括させていただきました。

檜田：今日は「NPO作りのためにできること」というテーマで、我々大学のほうでは大学や学生の活用法というお話をさせていただければ、というつもりでテーマ設定をしたのですが、NPO全体に関わる話題としても意味あるものになったのではないかと、思えます。NPOのある程度組織が大きくなった場合の運営の仕方や、外部の支援を積極的に受ける形でのNPO立ち上げの時の問題とも、内容的に重なったかと思えます。そのような観点で、発表された六名のかたがた、順番に一言ずつ「力あるNPOづくりのためにできること」というテーマへのメッセージみたいなものを最後にお話いただければと思います。



齋藤：経験の浅い人をどう育てるか、それは組織の中において直面する問題なのですが、失敗を経験させて改めさせるというのは、失敗が許される状況だといいいのですが、許されない状況では、失敗する人間は最初から入れないということになってしまうのですけれども、やはり、大学を出てすぐ社会に出た人間というのは、仕事をやらせてみてここが駄目だと指摘しないと、改まるものではないということがあると思えます。これはうちの組織も同じなのですが、失敗するとわかっている人間にやらせて、それをカバーするというのは、出来る人間がやるよりずっと手間もかかるし、リスクも大きいことなんです、それをしないと人は育たないので、その手間を惜しまずに人を育てて行かなくてはならないという心の広さが必要かと思えます。

矢部：僕はどこかで聞いたことの受け売りなのですが、20世紀型の教育というのは、空欄に回答を埋めさせてそれを覚えさせる教育で、21世紀の教育は回答のない、回答は無数にあって、その中で自分が納得のいく解を選べるかということが重要だというふうにい

っていて、私はそれを聞いて非常に感銘を受けました。正解を選ぼうと思うと間違っただことをしちやいけないのではという気持ちが先に立つのですが、自分が納得のいく解を選ぶような学生を育てれば、それなりにチャレンジしていくのではないかと思います。それを自分だけでは出来ないで、ここにいる皆様も含めた色々な方々とのマッチングすることによって達成していきけるのではないかと考えておりました、そのマッチングを請け負うところに大学の役割を感じておりました、学生を手配師的に送り出して行きたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

本郷：私はNPO団体の理事長として、また大学の教員として、どちらも人と関わる仕事です。どのような人を育て育んでいくかが重要になってきます。私自身もその中で成長していきけるそういう理事長であり教員でありたいなと思います。今後ともよろしくお願い致します。

饗場：先ほど、若者を引きつけるブランドイメージという話がありましたが、その背景にある重要な要素の1つは資金だと思うんですね。ピース ウインズの場合、その資金が2002年で約9億円というのは莫大な額だと思います。人道支援型NGOが日本でこれだけの資金力を持つのは珍しい。大西さんが最初立ち上げたNGOは失敗したわけですが、その原因は資金不足だったと思います。そこで大西さんは、大きなスポンサーを見つけてきて、その資金によって一気に急成長した面があると思います。やはりそういった意味で資金力というのはNPOにとって重要な問題です。それを大学に求めてもらっても困るのですが、単にイメージ戦略だけではいけないという点もあると思います。

また、大学は敷居が高いという話がありましたが、確かに中にはこういうのが嫌いという先生もおります。しかし最近では地域と一緒にやっという人もおまして、駄目もとで一度来ていただくと結構、矢部先生のような人もいたりしますので、その辺、積極的に利用していただけるといいかなと思います。

中村：NPOの中には行ってきて魅力のあるものを自分たちで探してくれるのが一番なのですが、それ上にわたしたちのほうでも、こんな事があると提案できるような会にしていきたいなと考えております。大変魅力のある会というには人は入ってきてくれますので、やはりおもしろい事をこちらから投げかけていきたいと思っております。会に入ってきてくれるのは、やはり私たちの側にも反省すべき点があるのではと思います。その中で、何でもこの会でやって頂ければ、私たちのほうは愛着とか誇りのあるまちづくりが出来たらいいなと思っておりますので、それに向かっていってくれるのであれば、何を考えてやってくれても、わたしのほうの中ではやっというと思います。私たちの活動は常に失敗だらけです。

麻野：やはり今日の分科会報告でもありましたが、環境の問題も突き詰めていけば、やはり人だというふうな報告がありました。NPOにとっても社会にとっても、何がキーポイントになるかというやはり人だと思っております。ところが今の世のなか、教育の問題あるいは、若者の生活の問題、あるいは人の生き方という問題が昔と比べると想像も出来ないような、世の中になっております。従ってもう一度、人の教育という問題について、あるいは人材の育成という問題について、家庭から地域から、教育関係から、あるいは私たちのようなNPO団体からと、みんなが考え直して行かなくてはいけないのではと考えております。そういう点で、昨日の分科会で教生塾一步会の新開会長がお話をされておりましたが、今年の11月から来年の1月にかけて小学生・中学生のボランティア体験学習というのが行われます。これは、環境から障害者・子供達・高齢者福祉まで全部はいつているので、社会経験を積むには非常に良い体験ではないかと思っております。大学も、こういうのを参考にしてNPO団体のほうへ学生をだしていただいたら、少々出来が悪くても、受ける団体によっては結構指導できるのではと、こういうふうにお思っております。ひとつ人作りをやり直すという点でNPOを信頼して出してみたいと思います。受けるところは

受けて、しっかり頑張って世直しのために頑張っていきたいなと思っております。

樫田：どうもありがとうございました。延長した時間をさらに伸ばして申し訳ありませんでした。これで「第3回とくしまNPOフォーラム」のシンポジウム、『力あるNPOづくりのためにできること』を終了させていただきます。壇上のパネリストの方々、フロアの聴衆の方々、どうもありがとうございました。

＝司会・総括討論者・パネリストのプロフィール＝

司会：樫田美雄（徳島大学総合科学部）

授業では、社会福祉研究と家族社会学の講義を行う。精神障害者施設の施設内文化の研究で最初の雑誌掲載論文を執筆。その後、身体障害者の障害者スポーツ研究や、インフォームドコンセントのなかでの家族の働きの分析などを行う。今年度から、地域貢献特別推進事業の、「ボランティア・市民活動立ち上げ支援事業」を担当することになる。

総括討論者：山中 英生（徳島大学工学部）

専門は都市の交通計画、道をジグザグにして車をゆっくり走らせるという道づくりが研究の始まり。市民対話の難しさを身にしみて感じながら、車が遠慮するまち、歩いて暮らせるまちの研究を進めてきた。徳島では景観デザイン、公園づくりのワークショップなどに参加するようになる。

最近では、参加型計画、ワークショップ運、港活性化のNPOなどの実践に多く関わるようになる一方、自転車など、環境と人々にやさしい「交通まちづくり」の研究を進めている。

パネリスト：

- 齋藤雅治（NPO法人 ピース ウインズ・ジャパン海外事業部）

東京本部の海外事業部において、アフガニスタン、シエラレオネ、およびインドネシアにおける支援事業の管理、予算管理、内の助成団体との折衝などの後方支援を担当。2002年7月から現職。 際協力事業団（JICA、現独立行政法人・国際協力機構）において途上 に対する政府開発援助に関する業務に携わった経験に基づき、ODA 事業と NGO 活動双方の特性を理解した上で、より効果的な海外事業の展開を模索している。

所属団体の紹介：（特）ピース ウインズ・ジャパン（PWJ）

紛争や貧困などの脅威にさらされている人びとに対して支援活動を行う非政府組織（NGO）。日本に本部を置き、イラク、モンゴル、インドネシア、東ティモール、シエラレオネ、アフガニスタン、およびその他の地域で活動を行なっている。

PWJ は 1996 年の設立以来、「必要な人びとに必要な支援を」をモットーとし、民族、政治、宗教、信条にとらわれることなく、境を越え、難民、内避難民、災害被災者、また貧困に苦しむ人びとを支援している。

- 矢部拓也（徳島大学総合科学部）

専門は都市社会学、地域社会学。都立大学大学院社会科学博士課程に進学した 1998 年から、毎月 1 週間程度、中心市街地活性化の先進事例である滋賀県長浜市に滞在。地元の人と一緒にまちづくり活動を行いながら、調査研究を行っている。そのような経緯から、長浜のまちづくりの結節的役割をもつ「まちづくり役場」の理事となる。中心市街地活性化研究が専門であるので、徳島市銀座に居を構えた。新町川を守る会のボートハウスの近所なので、土日はひょうたん島ク

• NPO



• You

NPO You



•

• NPO

＝講演者・発言者・司会者の所属＝

- 山中英生：徳島大学総合科学部
(メールアドレス：yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp)
- 齋藤雅治：NPO法人 ピース ウィンズ・ジャパン海外事業部
(メールアドレス：masaharu_saito@peace-winds.org)
- 矢部拓也：徳島大学総合科学部
(メールアドレス：takuya@flamenco.plala.or.jp)
- 中村英雄：NPO法人 新町川を守る会
(FAX：088-623-2707)
- 本郷澄子：四国大学短期大学部、NPO法人 You&ゆう代表
(メールアドレス：h-sumiko@shikoku-u.ac.jp)
- 饗場和彦：徳島大学総合科学部
(メールアドレス：aibak@ias.tokushima-u.ac.jp)
- 麻野新一：NPO法人 さわやか徳島代表
(メールアドレス：asano_nobuko@mvj.biglobe.ne.jp)
- 阿部圭宏：市民がささえる市民活動ネットワーク滋賀代表
(メールアドレス：yoshi-ab@mx.biwa.ne.jp)
- 寺尾俊喜：徳島市市民環境部市民協働課
(メールアドレス：simin_kyodou@city.tokushima.lg.jp)
- 檜田美雄：徳島大学総合科学部
(メールアドレス：kashida@ias.tokushima-u.ac.jp)